

# 東北大学のAO入試における「自己採点利用方式」に対する高校側の意見

○倉元直樹<sup>1</sup>，宮本友弘<sup>1</sup>，泉毅<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東北大学

## 1 問題

新しい大学入試制度の導入が平成 33 年度入試からにも関わらず、未だにその骨格が固まっていない。不確実な状況の下、各個別大学は意思決定を迫られている。制度改革の中心は、英語 4 技能の測定を目的とした民間の資格・検定試験の活用、大学入試センター試験（以下、「センター試験」と表記する）に代わる共通テストへの記述式問題の導入、いわゆる「主体性」の評価ということになる。

2017 年 7 月 13 日公表の実施方針（文部科学省，2017）では「各大学は、認定試験の活用や、個別試験により英語 4 技能を総合的に評価するよう努める（p.9）」ことを求められ、大学入学共通テスト（以下、「新共通テスト」と表記する）については「大学が指定した教科・科目については、全ての問の結果の活用を求める（p.10）」となっている。いわゆる主体性の評価は「調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的な活用を促す（p.48）」となっている。

それぞれが重要な問題だが、東北大学においては、さらに固有の問題が生じている。それは、記述式を含む新共通テストの成績提供時期を「現行の 1 月末から 2 月初旬頃の設定から、記述式問題のプレテスト等を踏まえ、1 週間程度遅らせる方向で検討する（p.31）」とされたことによる。AO入試Ⅲ期（以下「AOⅢ期」と表記する）の「日程問題」が生じたのである。センター試験を第 1 次選考に利用する AOⅢ期は余裕のない厳しい日程で運営されている。新共通テストの成績提供が 1 週間遅れると、東北大学では現行方式による AOⅢ期の実施が不可能となる（倉元，2018）。そこで、新共通テストの自己採点を利用して AOⅢ期の第 1 次選考を実施するアイデアが浮上した（以下、「自己採点利用方式」と呼ぶ）。

自己採点とは、受験者自身が自ら記録しておいた解答のメモに基づき、受験後に発表される正解及び配点によって、自分の成績を推定することをさす。センター試験制度の下では出願先の最終決定に欠かすべからざる仕組みとなっており、概ね正確な自己採点が行われていることを前提に現在の出願日程が成り立っている（内田他，2018）。自己採点そのものはセンター試験の受験者が通常行っている行為であり、自己採点利用方式は受験者に新たな負担を強いるものではない。しかし、第 1 次選考とは言え、選抜に利用することについては議論が生じよう。

そこで、東北大学入試センターはこの問題について高

校側の意見を収集することとした。本稿はその調査結果の分析に基づくものである。

## 2 目的

調査主体は東北大学入試センター。以下の 3 点に関わる高校側の意見を収集することを目的で行われた。

- (1) 新共通テスト導入に伴う日程変更に対応した AO 入試Ⅲ期第 1 次選考における「自己採点利用方式」の採用について
- (2) 認定試験の活用に関する国大協基本方針について
- (3) 新共通テストにおける記述式問題の活用について

## 3 方法

### 3.1 調査対象、調査方法

過去 4 年間のデータに基づき、東北大学に志願者、合格者を多数輩出する高等学校等 269 校を対象に質問紙調査を行った。調査票は A4 判両面 1 枚で、内容は上記 (1) に関連する項目が 4 項目、(2) 及び (3) に関連する項目が各 1 項目であり、主だった項目に自由記述欄を設けた。それに加えて、(1) に関する自由記述のみの項目を 2 項目加えた。実施方法は郵送調査である。校長宛に東北大学入試センター長名で依頼し、状況を熟知した教員が回答を記入することを求めた。なお、入試センター長を通じて本調査が研究倫理審査の対象外であることを確認している。

### 3.2 分析方法

本稿では主として自己採点利用方式に関する質問の自由記述部分について分析を行った。調査には 6 か所の自由記述記入欄が設けられており、そのうちの 4 か所が自己採点利用方式に関わる質問である。まず、記入された意見の概要を内容に鑑みていくつかのカテゴリーに分類した。さらに、多くの回答に共通するキーワードや概念を取り出し、各回答がそれらを含んでいるか否かを判定を行った。意見のカテゴリー分類は第 1 著者が行ったものを 3 名の共同研究者で確認した。キーワードは 3 名で合議して分類、判定したものを最終的に第 1 著者が再確認した。

上記の手続きで数量化された自由記述に関する分析に際しては、クロス表の対応分析、ないしは、多重クロス表の多重対応分析を用いることとした。

## 4 結果

### 4.1 概要

調査結果の概要は以下のとおりである。

調査設計段階の全志願者数基準で8割近く、AOⅢ期合格者数で9割以上がカバーされた。218校から回答があり、返送率は単純集計で81.0%に達した。まず、東北大学のAOⅢ期に対する知識と関心の程度について4段階評定で質問した。結果は「よく知っている」が50.9%、「ある程度知っている」が43.6% (Q2\_1)、「強い関心がある」が60.9%、「ある程度関心がある」が21.4% (Q2\_2)となり、総じて知識があり、関心が高い層が回答していた。

第2次選考はセンターから提供される実際の成績に基づいて行われることなどを説明したうえで、自己採点利用方式に対する意見を求めた。選択肢は「導入もやむを得ない(容認)」と自己採点利用方式を導入なら「AOⅢ期を廃止すべき(廃止)」の二者択一とした。結果は前者が58.5%、後者が41.6%であった(Q2\_3)。自己採点の不正確さについては、導入予定の記述式は除外し「自己採点結果の申告が不正確な東北大学受験者」で始まる3つの選択肢を設けた。「ほとんど存在しない」13.8%、「少数は存在する」が68.2%、「相当数存在する」が15.2%であった(Q2\_4)。この他、「自己採点を正確に申告するために大学がサポートできること(Q2\_5)」「AOⅢ期の在り方についての要望(Q2\_6)」について自由記述で記入を求めた。

英語認定試験を一般入試の全受験者に課すという国大協の基本方針に対する賛否について尋ねた(Q3)。「賛成」が8.3%、「やむをえない」が49.5%、「反対」が42.1%であった。新共通テストの記述式問題について、選抜でどの程度活用すべきかを尋ねた(Q4)。「とても重視」が5.7%、「どちらとも言えない」が55.1%、「あまり重視してほしくない」が39.3%であった(以上、倉元・長濱, 2018)。

### 4.2 自由記述の分類

自由記述のカテゴリ分類結果は表1~4に示す。

表1. Q2\_3 自己採点利用方式への賛否の分類

1. AOⅢ期の存続希望 (AO入試の理念等)	37 (20.7%)
2. AOⅢ期の存続希望 (共通試験への信頼)	10 (5.6%)
3. AOⅢ期の存続希望 (自己採点問題なし)	30 (16.8%)
4. AOⅢ期の存続希望 (自己採点不安)	28 (15.6%)
5. どちらとも言えない	8 (4.5%)
6. AO入試必要 (それ以外の方法)	17 (9.5%)
7. AOⅢ期廃止希望 (不正申告誘発)	12 (6.7%)
8. AOⅢ期廃止希望 (不公平, 正確さに懸念)	35 (19.6%)
9. AO入試廃止希望 (AO入試自体に疑念)	2 (1.1%)
合計	179 (100.0%)

表2. Q2\_4 自己採点が不正確な東北大学受験者の分類

1. (条件を付ければ) 不正申告の懸念なし	19 (10.9%)
2. 実情からあまり問題なし, やむを得ない	12 (6.9%)
3. 東北大学受験層に問題なし	6 (3.5%)
4. 多少のミスはある	45 (26.0%)
6. 不正申告の懸念が少しある	22 (12.7%)
7. かなりの程度のミスがある	41 (23.7%)
8. 不正申告の懸念がかなりある	28 (16.2%)
合計	173 (100.0%)

表3. Q2\_5 自己採点のための大学からのサポートの分類

1. 自己採点利用反対, 他の選抜方法の提案	11 (6.8%)
2. ない, 思いつかない, 不可能, 難しい	51 (31.7%)
3. わからない, 判断できない, 不明	6 (3.7%)
4. 高校側, 受験生の責任, サポート不要	13 (8.1%)
5. 倍率基準の緩和/廃止, 選考方法の工夫	15 (9.3%)
6. 小間ごとの入力, 入力サイトの開設等	10 (6.2%)
7. ペナルティ/ミスによる不合格者救済	19 (11.8%)
8. 制度の周知徹底/合格基準明示情報提供	26 (16.1%)
9. 不正申告/ミスはなくせない	10 (6.2%)
合計	161 (100.0%)

表4. Q2\_6 AOⅢ期の在り方についての要望の分類

2. AO入試は廃止すべき	8 (6.1%)
3. AOⅡ期への統合	6 (4.5%)
4. 出願時期前倒し, 書類等の第1次選考	23 (17.4%)
5. 実施時期見直し (上記以外)	9 (6.8%)
6. 第1次倍率緩和/廃止, 選考方法の工夫	34 (25.8%)
7. 自己採点利用方式容認/現状維持要望	37 (28.0%)
8. 新しいAO入試の考案	5 (3.8%)
9. その他	10 (7.6%)
合計	132 (100.0%)

### 4.3 キーワード・概念

最初に自己採点利用方式への賛否に関わる「Q2\_3」の自由記述について分類カテゴリーを定め、そこから一部削除, ないしは追加する形で他の項目の自由記述についてキーワード・概念の有無について判定を行った。少数の回答のみに現れたキーワード・概念については, 分析には採用しなかった。

各キーワード・概念の上位概念は「A. 評価・態度」「B. 選抜方法」「C. 入試の意義付け」「D. リスク」「E. 大学へのサポート」「F. 実施可能性」である。各自由記述におけ

るキーワード・カテゴリー出現頻度を表5～8に示す。

表5. Q2\_3 自己採点利用方式への賛否（頻度）

a1. 効用/評価	29 (16.2%)
a2. やむなし	27 (15.1%)
a3. 懸念なし	23 (12.8%)
a4. 懸念あり	78 (43.6%)
a5. 拒否	33 (18.4%)
b1. センター/共通試験/正確	55 (30.7%)
b2. AO入試	73 (40.8%)
b3. 自己採点	98 (54.7%)
b4. 第1次選考	49 (27.4%)
b5. 最終合格/第2次選考	25 (14.0%)
b6. 手続き/周知の工夫	32 (17.9%)
b7. 定員変更/制度変更/記述式	29 (16.2%)
b8. 日程問題	16 (8.9%)
c1. 理念/学生像	21 (11.7%)
c2. 東北大学	24 (13.4%)
c3. 学力担保	15 (8.4%)
c4. 多面的評価/多様性	13 (7.3%)
c5. 受験機会/希望者/高校生/受験生	34 (19.0%)
c6. 受験戦略/進学指導/高校教員	20 (11.2%)
c7. 継続希望	48 (26.8%)
d1. 公平性/正当性	39 (21.8%)
d2. ミス/不正確	51 (28.5%)
d3. 不正	28 (15.6%)

表6. Q2\_4 自己採点が不正確な東北大学受験者（頻度）

a3. 懸念なし	54 (31.2%)
a4. 懸念あり	138 (79.8%)
a5. 拒否	49 (28.3%)
b1. センター/共通試験/正確	85 (49.1%)
b3. 自己採点	26 (15.0%)
b4. 第1次選考	34 (19.7%)
b5. 最終合格/第2次選考	12 (6.9%)
b6. 手続き/周知の工夫	25 (14.5%)
c2. 東北大学	51 (29.5%)
c5. 受験機会/希望者/高校生/受験生	20 (11.6%)
c6. 受験戦略/進学指導/高校教員	13 (7.5%)
d1. 公平性/正当性	114 (65.9%)
d2. ミス/不正確	83 (48.0%)
d3. 不正	54 (31.2%)

表7. Q2\_5 自己採点のための大学からのサポート（頻度）

a3. 懸念なし	14 (8.7%)
a4. 懸念あり	41 (25.5%)
b1. センター/共通試験/正確	38 (23.6%)
b3. 自己採点	52 (32.3%)
b4. 第1次選考	28 (17.4%)
b5. 最終合格/第2次選考	38 (23.6%)
b6. 手続き/周知の工夫	77 (47.8%)
B6-1. 周知徹底/情報提供	35 (21.7%)
B6-2. 自己採点サポートシステム	12 (7.5%)
B6-3. ペナルティ	24 (14.9%)
B6-4. 救済/合格緩和	14 (8.7%)
B6-5. 基準点/誤差範囲	20 (12.4%)
b7. 定員変更/制度変更/記述式	12 (7.5%)
c5. 受験機会/希望者/高校生/受験生	18 (11.2%)
c6. 受験戦略/進学指導/高校教員	25 (15.5%)
d2. ミス/不正確	27 (16.8%)
d3. 不正	19 (11.8%)
E1. 解決不能/実施困難	26 (16.1%)
E2. アドバイスなし/困難	61 (37.9%)

表8. Q2\_6 AOⅢ期の在り方についての要望（頻度）

a3. 懸念なし	16 (12.1%)
a4. 懸念あり	25 (18.9%)
b1. センター/共通試験/正確	57 (43.2%)
b2. AO入試	56 (42.4%)
b3. 自己採点	17 (12.9%)
b4. 第1次選考	46 (34.8%)
b5. 最終合格/第2次選考	29 (22.0%)
b6. 手続き/周知の工夫	57 (43.2%)
B6-4. 救済/合格緩和	21 (15.9%)
B6-5. 基準点/誤差範囲	13 (9.8%)
B6-6. 書類審査/面接	23 (17.4%)
b7. 定員変更/制度変更/記述式	48 (36.4%)
b8. 日程問題	58 (43.9%)
B9. 記述式	12 (9.1%)
c1. 理念/学生像	11 (8.3%)
c2. 東北大学	15 (11.4%)
c5. 受験機会/希望者/高校生/受験生	43 (32.6%)
c6. 受験戦略/進学指導/高校教員	24 (18.2%)
c7. 継続希望	20 (15.2%)
d1. 公平性/正当性	10 (7.6%)
F1. 不可能/廃止	11 (8.3%)
F2. 負担	28 (21.2%)

#### 4.4 対応分析結果

図1～図4それぞれの質問項目の自由記述分類と出現キーワードに「私立」「合格者数20名以上」「AOⅢ期合格者数3名以上」「東北地方」の4変数を加えて分割表にした上で対応分析を行った結果ないしは選択肢を変数に加えて多重対応分析を行った結果である。

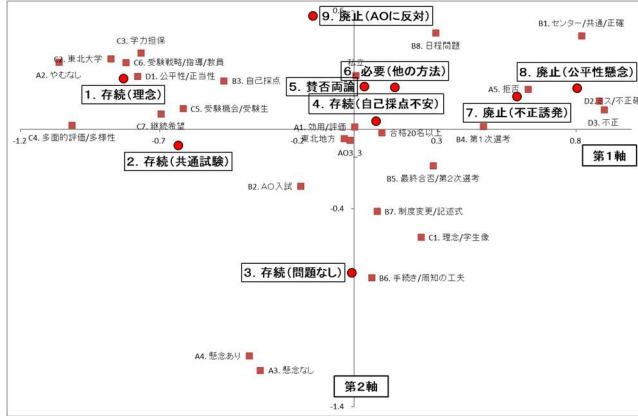


図1. Q2\_3 自己採点利用方式への賛否 (対応分析)

図1の右上がAOⅢ期「廃止」、左下が「存続」と解釈できる。「1. 存続(理念)」は受験生や指導に影響を与え、多様性や学力担保を図る東北大学の理念から自己採点利用もやむなしとしたうえで存続希望としたように見える。「3. 存続(問題なし)」は手続きの工夫とセットである。

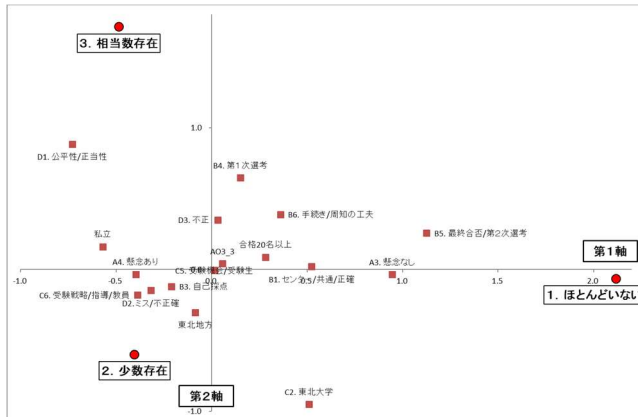


図2. Q2\_4 自己採点が不正確な東北大学受験者 (多重対応分析)

図2は Q2\_4 の3つの選択肢と自由記述の関係について多重対応分析を行った結果である。「1. ほとんどいない」は、最終合否の手続きに言及し、懸念なしと答えた様子が見て取れる。「2. 少数存在」は自己採点にミスと懸念、指導体制などに触れていた。

第2軸が少数の変数の値が極端で図が見にくいため、

図3は第1軸と第3軸で図示することとした。

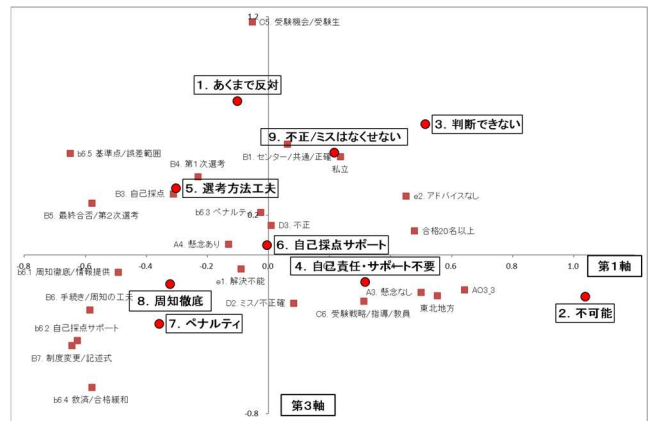


図3. Q2\_5 自己採点への大学からのサポート (対応分析)

必ずしも判然とはしていないが、あくまでも反対、アドバイスはないとする回答は受験生、共通テスト等に言及していたが、「6. 周知徹底」「7. ペナルティ」といったカテゴリーに集約されるような具体的なアドバイスを挙げていた回答も多数見られた。

図4も図3と同じ理由で第3軸を縦軸に採用した。

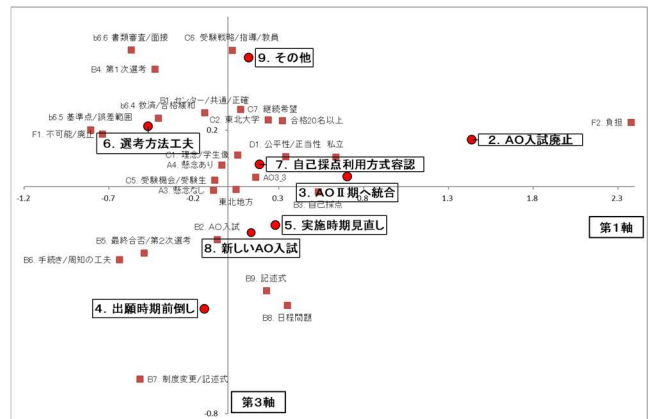


図4. Q2\_6 AOⅢ期への要望 (対応分析)

「2. AO入試廃止」はとにかく拒否の姿勢である。一方、様々な要望が寄せられていたが、残念ながら多くは過去に検討して、すでに断念した方針でもあった。

#### 5 結語

2018年7月26日に東北大学入試センターウェブサイトにて「AOⅢ期継続」方針が予告された。原則第1次選考廃止となったが、必要な場合は自己採点利用方式が採用される。改革の設計が細部に渡って配慮されていないことの被害だが、工夫するしかない。高校側にも様々な見解がある。混乱を最小限にするには丁寧に説明し、意見を聴取するプロセスは個別大学として必須と言えるだろう。